

松本 和也

1. はじめに

2019年度アジア研究センター個別奨励研究に、「日中戦争期における日本での魯迅受容の多角的分析」という研究課題で応募し、幸いにも採択して頂き、目下、調査研究に取り組んでいる。とはいえ、このテーマは近年の構想ではなく、10年以上前に遡る。大学院時代からつづけてきた太宰治研究の延長線上で、科学研究費補助金・若手研究(B)「日中戦争期「魯迅」受容の多角的研究——小田嶽夫・竹内好・太宰治を中心に」(2009～2010年度、課題番号21720068)を構想したのが、始まりだった。

その際には、2つの軸があった。その1つは、文学史でいうと昭和10年代後半に、ジャンルを異にしながらも魯迅をモチーフとした著述が、小田嶽夫の評伝『魯迅伝』(筑摩書房、1941)、竹内好の評論『魯迅』(日本評論社、1944)、太宰治の小説『惜別 医学生頃の魯迅』(朝日新聞社、1945)と陸続と刊行されたことにあり、もう1つは小田嶽夫という「支那通」文学者への注目であった。

一口にいえば、魯迅その人よりも、魯迅をモチーフとした日本の文学者に興味があったのだ。その成果は、拙論「昭和一〇年代における魯迅受容一面——佐藤春夫・中野重治・小田嶽夫——」(『立教大学日本文学』2010.7)、「小田嶽夫『魯迅伝』の形成と変容(一九四〇～一九六六)」(『立教大学日本文学』2011.7)にまとめたが、いずれ、“日中戦争下における魯迅受容”という観点から、再調査を行いたいと考えてきたのだ。ずいぶんと時間がたってしまったが、ようやく、その機会に恵まれたということになる。

2. 興味関心としての魯迅受容

私にとって、日中戦争期における魯迅(受容)

という問題構成を考える契機となったのは、先述した作家・小田嶽夫への注目からであった。

小田嶽夫『魯迅伝』(図1)序章には、次のような一節が読まれ、特に注目される。



図1：小田嶽夫『魯迅伝』カバー

魯迅は一九三六年十月に死んでゐる。この彼の死んだ年の一九三六年以前と、翌年の一九三七年以後とでは支那の歴史に画然とした色分けがつく。即ち支那事変以前と以後である。魯迅が生きてゐて事変に遭遇したなら如何の感想を抱いたかは軽々に判断を許されない。そして私は魯迅が事変の前夜に死んだ事に自分の感傷から無理にも何か意味をつけて考へたがるのである。——事変が支那民族にとつても曙となるならば、魯迅は暗黒のさ中に死んだ事になるし、それがより悪い状態を持ち来すならばせめても魯迅は救はれた事になる。若し又支那がかういふ大事変の洗礼の後にも尚本体を改めず、旧態依然を続けるならば魯迅は空しく徒労を続けたことになる。

こうした見方にたてば、日中戦争が分水嶺となって、日本での魯迅(受容)は、その歴史的な意味を変容させたことになる。その変容に関わる言説を検討することができれば、日本における魯迅の意味ばかりでなく、そこに関わったさまざまな力学を考察することができるかもし

れない。そのために、魯迅（受容）という興味関心から、広汎な新聞・雑誌を対象として、調査・分析を進めたいと考えていた。

少し調査を進めたところで、興味深い新聞記事・匿名コラムにいきあたった。次に引く、大井真爪「壁評論 魯迅の藤野野先生は健在！」（『読売新聞』1937.2.20）がそれである。あらかじめいえば、藤野先生とは、若き日の魯迅が、仙台医学専門学校に留学中に、ノート添削など、細やかに面倒を見てもらったという解剖学教授・藤野源九郎である。魯迅には、この恩師をモチーフとした「藤野先生」（原著『莽原』1926）という小説作品もある。先のコラムで注目したいのは、次の一節である。

日本人がすべて藤野先生的であり、中国人が凡て魯迅的であつたら、日支の間に信愛以外に何ものがあらうぞ。しかもそれは決して難事ではないのだ。現に東京だけでも支那留学生が三千人以上ゐると聞いてゐる。彼等はみな魯迅のやうに支那の新世代を担つて行く人々だが、彼等に接する日本中、果して一人の藤野先生があるであらうか。（5面）

ここでは、かつての魯迅と藤野先生との関係が、日中友好の象徴的事例として語られている。そうであれば、この研究課題を進めていくに当たっては、太宰治『惜別』においてフォーカスをあてられた、清国留学生時代の魯迅についての理解を深める必要がある、と考えた。もとより、東北大学史料館への調査は、本研究課題の申請時から計画していたが、いよいよその重要性が増したことを確認し、この10月、東北大学での調査のため仙台に向かった。

3. 魯迅記念資料室

仙台時代の魯迅については、仙台における魯迅の記録を調べる会編『仙台における魯迅の記録』（平凡社、1978）、阿部兼也『魯迅の仙台時代 魯迅の日本留学の研究』（東北大学出版会、1999）、魯迅・東北大学留学百周年史編集委員会編『魯迅と仙台 東北大学留学百周年』

（東北大学出版会 2004）など、すでにゆきとどいた調査報告がまとめられてはいる。

それでも、仙台医学専門学校時代の魯迅に関する資料を実見することはもちろん、キャンパスや下宿先の具体的様相や位置関係を探り、体感するために、若き日の魯迅が留学した仙台医学専門学校、現在の東北大学での調査を行うことは、かねてからの念願であった。

広大な東北大学片平キャンパスには、仙台医学専門学校跡地の碑があり、その隣に魯迅像が並置されていた（図2参照）。



図2：東北大学片平キャンパス

現在、東北大学史料館2階展示室は工事中であるが、この10月半ばより、魯迅記念展示室のみ、階段教室の隣で展示が始まった（図3参照）。



図3：東北大学魯迅記念展示室

こちらでは、魯迅の仙台医専時代を彷彿とさせる多くの資料を、実際に見ることが叶った。中でも、魯迅の退学の件を記した生徒名簿や、藤野先生の講義ノート、「幻燈事件」で知られる日露戦

争の幻燈などは、“魯迅がかつてここにいて、そして、ここから去ったこと”をまざまざと思い知らされるような、重みのある資料だった。



図4：魯迅下宿跡

4. おわりに

東北大学を後にして向かった先は、キャンパス西側にある、仙台医専時代に魯迅の下宿「佐藤屋」跡地である、図4の碑が建てられていた。今回、仙台に着いて後に、この場所が「魯迅記念広場（仮称）」として整備中であることを知った。

ここもまた、“魯迅がかつてここにいた”ことを示す痕跡であり、しかも、仙台市によって顕彰されようとしている。今秋には、佐高信『いま、なぜ魯迅か』（集英社、2019）も刊行され、魯迅再評価の機運が高まっているようにも思われる。

仙台調査の成果を活かしながら、今後は、文献調査を中心に、同時代言説に即したアプローチによって、本研究課題を着実に進めていきたい。

（所員 外国語学部教授）

2019年度 アジア研究センター活動報告

2019年4月～2019年10月

共同研究グループ主催による公開研究会

●研究グループ：「東アジアに政治発展」（共催）

◆2019年5月24日（金）

会 場：3号館 305教室

テーマ：「ポストひまわりの台湾－選挙・政治・安保」

報告者：千北辰（台湾 退役 陸軍少将）

●研究グループ：「東アジアの国際経済・ビジネスの変遷と現状そして今後の展望」

◆2019年5月17日（金）

会 場：アジア研究センター（16号館108号室）

テーマ：「PCビジネスのロジとSCM」

報告者：柴田 淳志（武蔵大学非常勤講師）

◆2019年7月31日（水）

会 場：アジア研究センター（16号館108号室）

テーマ：「一帯一路構想の進展プロセスを考える」

報告者：秋山 憲治（神奈川大学アジア研究センター客員教授）

◆2019年9月25日（水）

会 場：アジア研究センター（16号館108号室）

テーマ：「日本の教育関連ビジネスの新興国市場における可能性－ベトナムとスリランカの事例から－」

報告者：山本 崇雄（神奈川大学経済学部教授）

●研究グループ：「植民地国家と近代性：

アジア諸国を中心とする比較研究」

◆2019年7月13日（土）

会 場：アジア研究センター（3号館208講堂）

テーマ：「パイナップルのグローバルヒストリー：

ハワイ・台湾・沖縄を結ぶネットワークとして」

報告者：八尾 祥平（神奈川大学経営学部非常勤講師）